

ニュースレター

NO.67

発行 / NPO 法人市民活動サポートセンターいなぎ
事務局 / 〒 206-0802 稲城市東長沼 2112-1
稲城市地域振興プラザ 1F
TEL 042-378-2112 FAX 042-378-6971
E-mail : info@i-inagi-support.org
http : //www.i-inagi-support.org/

ワクワクドキドキできる何かを探して

対談 アフターコロナの市民活動の楽しみかた

小林 攻洋さん



平田 富美子さん

小林 昨年来のコロナ禍で「感染防止のために3密を避ける」ということで、人と人が顔を会わせる機会が大幅に減り、市民団体の活動にも大きな影響が及んでいます。そこで、Zoomなどwebを活用したりリモート会合の仕組みが普及してきて、それはそれで良いことですが、やはり市民活動の原点は“人と人の密なつながり”だろうと思います。

そこで今号では、いずれコロナ禍が収束するときを見据え、改めて原点に立ち返って市民活動の面白さや活性化させる秘訣、市民活動によって地域社会がどうなっていくか等々、稲城の市民活動を支えてこられた平田さんにお話を伺いたいと思います。

まず、平田さんというと“幼児教室”のイメージがあり、それが稲城での市民活動の出発点だったかと思うのですが、幼児教室に関わるようになった経緯などからお話いただけますか。

子育てを通じて地域デビュー

平田 私は、稲城が市になる直前の昭和46年3月、当時出来たばかりの平尾団地に引っ越してきました。保育士の資格をとろうと結婚後に短大の保育科へ進んだのですが、

大学2年の夏に長女が生まれ、当時は保育園に乳児を預けられなかったので、「半年間、子どもを預かってくれませんか」と団地に張り紙をしたら、預かってくれる方が出てきて、そのおかげで卒業できました。

やがて2人目が生まれましたが、子育てが楽しくて、発達の段階も本当に教科書通りで、毎日が発見の連続でした。ですから、はじめは2人目が保育園に預けられるようになったら保育士として働こうと思っていたのですが、「こんな楽しい時期を他人に預けるのはもったいない、自分で育てよう」と思い直しました。朝2人の子どもにご飯を食べさせたら公園へ連れて行って遊ばせる、という毎日を繰り返しているうち、やはり子どもにとって親はあくまで親であり、いくら一緒に遊んでも子どもの友達にはなれない、子どもにとって友達は必要なんだと気付きました。

そんなある日、「幼児教室を一緒に作りませんか」というチラシが団地に配られました。当時、稲城市の公民館講座で幼児教育講座というのがあり、それを受けた人たちが「平尾で幼児教室を開くから一緒にやりませんか」ということだったので、「これは私と考えていることが一緒だ」と思って幼児教室準備会に早速参加し、翌年ひらお幼児教室

※幼児教室とは：就学前の乳幼児を対象にした知育・体育・情操教育や友達づくりを行う場

が発足しました。

小林 当時は、規模の大きい団地等で幼児教室を作っていく社会的な流れがあったんですね。

平田 その頃は、今の第五保育園の場所が空き地で、そこを借りられることになりました。それから、晴海にプレハブの資材があると聞いてお父さんたちに取りに行ってもらい、宮大工をしていた人に指導してもらって、みんなで幼児教室の建物を手作りしました。そして2・3歳児の保育から始めたのですが、3歳児だけで2クラスの応募がありました。また、集会所保育から始まったときも団地の自治会に相談に行ったり、地域の方々に助けられました。

この幼児教室が、私が市民活動をするきっかけでした。専業主婦が、核家族の中で子育てだけをしていると閉塞感を感じてしまうと思いますが、私の場合は子育てを通じて地域社会に参加出来たことで、その後の人生が変わったような気がします。「私たち、幼児教室でずいぶん育てられたね、第二の青春だったね」と、その頃の仲間とよく言い合っていました。

小林 北欧では、子どものために住民同士で公園をつくることから地域社会が形成されるという話を聞いたことがあります。そういう共同の場を自分たちで手作りしようということから、子育て世代の社会参加が始まるんでしょう。

その当時、平尾に団地が出来て新しい住民が急に増えたわけですが、地元の人たちとの関係はどうでしたか。

平田 例えば、子どもたちに餅つき体験をさせたいと思ったら、地元の農家の方に相談に行き、後日実際に餅つきをさせてもらったり、「タケノコ掘りに来ないか」と誘っていただいたり、とてもお世話になりました。

小林 「子育ては楽しいから自分でやろう、みんなで一緒にやろう」という思いを出発点に、幼児教室を通じて、同じ立場の人だけでなく地元の人たちとも関係が出来ていったんですね。

市民活動は話し合いから

平田 短大生の時、ある幼稚園へ保育実習に行ったのですが、翌日の工作の準備で、先生が画用紙を全部型通りに切って一人分ずつセットにして、子どもたちは翌日それを紙に貼るだけにするんです。それで私が、「子どもが好きなように切ったり、好きな絵を描いて貼ったりするのは駄目なんですか」と訊いたら、「何言ってるの」みたいな感じで「決められたことをやってください!」と言われたんです。もうガックリきちゃって、「こういう幼稚園には絶対に子どもを入れない」と思った経験から、幼児教室を始めるときは“どういう保育をするか”“子どもにどういう経験をさせたいか”を、みんなで徹底して話し合いましたね。

小林 平田さんを見ていると、よく話し合いますよね、どこでも、どんな場面でも。

平田 互いに話し合って一つずつ進めないと、自分が納得できないことは人も納得してないだろうと思うので、やっぱり話し合いますね。



小林攻洋さん

平田富美子さん

1973年稲城市役所入所。広報広聴、生涯学習、福祉、企画などの業務に携わる。在職中の97年に、まちづくりグループ「いなぎエコ・ミュージー」を市民と一緒に立ち上げ、稲城の魅力の再発見と発信に努めた。2001年に市役所を定年退職後は、「市民活動サポートセンターいなぎ」の設立に携わり、現在も理事として運営に尽力している。03年からは、里山再生に取り組む「NPO法人いなぎ里山グリーンワーク」設立にも関わり、事務局長を務めた。

1971年平尾団地に入居。75年「なかよしサークル保育」を開始し、翌年「平尾幼児教室」を発足。88年向陽台に転居し、保育園新設準備に参加。93年まで同園に勤務した後、94年登録ヘルパー、99年「ふれあい広場ポーポーの木」を発足し在宅支援事業を開始する。2017年「支え合いネットワーク向陽台」に参加し、地域の縁側「すまいる向陽台」を始める。19年からは「すまいるネット」の活動も開始し、地域の助け合いネットワークづくりに精力的に取り組んでいる。

小林 決められたことをやるのではなく、“みんなで話し合って、良いと思った方向に進んでいく”という考え方。そのあたりが市民活動の基本であるような気がしますし、そういうプロセスが大事ですよ。実は市民協働、市民参加といっても、初めから結論が決められていて、自分はただその場に参加しているだけということも多い。しかし結果的に同じ結論に至るのだとしても、みんなで考えを出し合いながら作っていく方が絶対面白いし、良いものが出来るでしょう。

地域で助け合える仕組みづくり

平田 結局、幼児教室には18年関わりましたが、向陽台の町が出来たときに、「新しく保育園をつくるので手伝ってもらえないか」と声を掛けてもらって、そちらへ移りました。ところが身体を壊してしまい、「もう自分の人生も残り半分、老後のことを考えたら福祉の勉強をしておいたほうが良いな」と考え、ヘルパーの資格を取って高齢者施設に勤めました。その間に「ポーポーの木」の活動も始めていて、そちらでのヘルパー派遣の依頼が多くなり、忙しくなったので高齢者施設を辞めました。

小林 その、依頼というのは。

平田 困っているときはお互い様で、暮らしの中のちょっとしたことに困っている高齢者や、子育てや障がいのある子など大変な思いをしているお母さんが少しでも楽になるようにと、“困ったときはヘルパーを派遣しますよ”ということを「ポーポーの木」で始めたのが、口コミで広まって。

小林 「ポーポーの木」は、高齢者だけではなく障がい者も

子育ても、困っている人がいたら地域の中で助け合えるサービスを提供しようということなんです。でも前例がない活動だから、立ち上げてから大変だったでしょう。

平田 幼児教室以来の人のつながりがあったので、割と順調に進みました。前の職場で一緒だった人とか引越してから知り合った人などが集まってきて、「ヘルパーって大変じゃない?」「色々なお年寄りがいるから面白いよ」とか言い合って、「ポーポーの木」の仲間が増えていきました。

それで、平尾団地商店街の空き店舗を事務所に借りたいということになったのですが、商店街だからお店をやらなければいけない条件だったので、「NPO ふれあい広場ポーポーの木」というコミュニティ喫茶を開きました。“地域の居場所”として、地域に暮らす者同士、互いの顔が見える関係づくりをして、困ったときに助け合える場にしよう。

小林 私の家の近くに八百屋さんがあって、辺りな所なんだけど、わざわざみんなその店へ買いに来るんです。すると、そこで知り合いが増えて新しいコミュニティができる。要するに金儲け目当てではなくて、商売をしながら地域コミュニティを作っていこうということですね。

行政の隙間をうめる

平田 いま「ポーポーの木」は介護保険の指定事業所として運営していますが、介護保険制度の中でヘルパーとして行くと、ケアプランで決められたこと以外やってはいけないんです。しかし実際には、ゴミ袋が重くてゴミを出せない高齢者のお宅のゴミを帰りに出したり、ちょっとした手伝いが必要な人や家庭が結構あって、そういう制度の隙間をうめる活動が必要になっているんです。

小林 そこに今度は「すまいるネット」が入ってくるわけですね。

平田 稲城市が、“地域の中でちょっとした助け合いが出来るまちを作りたい”ということで、NPOや民生委員、自治会などを集めて会議を開いたんです。それから月に1回話し合いを持って、「支えあいネットワーク向陽台」という組織を立ち上げました。城山公民館にある「喫茶陽だまり」のスペースを借りて、月に2回「すまいる向陽台」という会を開いて、地域の人同士、顔が見える関係を作ろうとしています。

それと並行して、予め登録した支援者が利用者からの依頼を受けてちょっとした手助けをする「すまいるネット」という仕組みを作りました。これは無料だとお礼を用意したりして“無料より高いものはない”ことにもなりかねないので、15分間の手助けで250円という料金を設定しました。そのうちの8割を支援者に払って、2割を運営費として事務局に入れてもらいます。

最初に依頼があったちょっとした困りごとは、“リビングルームの電球が切れたので交換してほしい”ということで、男性の支援者がすぐ行ってくれました。あとは、玄関にかかっている大きな額が重いので外してほしいとか、組立家具を買ったけど組み立てられないとか。

誰のための市民活動?

小林 お話を聞いていると、平田さんの周りにはいつも仲間や賛同者が自然と集まってくるように思えるんですが、相当色々なご苦労もあったんじゃないですか。

平田 たまたま人に恵まれていたんでしょうね。

小林 でも、やはり人を引き付けるんですよ、真面目に考えるから。考え方が真面目だから。

平田 人から「忙しいのによくやるわね。偉いわね」って言われるんですが、「偉くなんかなくて。私は自分のためにやってるのよ」って返すんです。私もいつボケるか分からないから、私がウロウロ歩いていたなら「平田さん、こっちよ」とか「平田さんお昼ご飯食べたの?うちで食べていかない?」とか、そういうふうに言ってくれる町になったらいいなと。高齢化社会になったらヘルパーだってやる人がいなくなるから、自分のためにやってるんです。

小林 自分が困った状態になったときに助け合えるということはもちろんあるでしょうけれども、そういう活動をすることで自分自身が豊かになるという面もあるんじゃないでしょうか。色々な人と関わりながら色々な活動をする、友達も増えるし自分も楽しくなる。

平田 だから私も、幼児教室のチラシを見たときに“私と同じことを考えている人がいる”と思って加わったわけで、そこから幼児教室の人たちと「自分たちの老後、この先どうなるんだろうね」って話して、「もう折り返し地点過ぎたから、元気なうちに何とかしなくちゃね」ということになって、老人ホームや色々なところへ勉強に行って、それでみんなで作ったんです。自分たちのために。

小林 つまり、自分の人生の岐路と市民活動は重なる部分があるということですね。そもそも、平田さんにとって市民活動を一言で言うと何ですか?

平田 やっぱり「社会参加」だと思います。

小林 なるほど。地域コミュニティについては、どうですか?

平田 何かあった時には頼りになるけれど、普段はほったらかしが良いですね。

小林 よく「見守りの会」などというのがあるけれど、えてして、見守る人と見守られる人が一方通行で決まっちゃう。そうではなくて、普段から何か楽しいことをやって互いに顔見知りの関係になっていけば、何かあった時には自然と見守るでしょ。そこが大事な気がするし、やっぱり「楽しいこと」から始めなきゃと思うんです。

市民活動って義務とか責任でやるのではなくて、「自分がこれをやったら面白い」というワクワクドキドキ出来る何かを探して、仕事以外のことで何かをやるのが、自分の人生にとってのものすごく大事なんだと思います。そういう活動が地域社会の中でうまく回っていったら楽しいんじゃないかなって気がしますし、市民活動って楽しいことなんですよ。

今日はどうもありがとうございました。

今年度より市民活動サポートセンターいなぎの理事に就任した方々に、理事としての抱負や今後の市民活動に期待すること等を伺いました。(氏名の後のカッコ内は所属団体です)

○安東 道正 (稲城市芸術文化団体連合会)



私は38年間のサラリーマン生活の後、市民活動に参加するきっかけになったのがサポートセンターいなぎの金曜サロンスペシャルの講演でした。

現在、稲城市には多くのサラリーマンが住んでいます。サラリーマンは職種によっていろいろな技能や知識をもっています。人材の宝庫といっても過言ではありません。サポセンの理事としてこの宝を引っ張り出す仕組みを研究し、サラリーマンが市民活動に参加できるきっかけづくりを試みたいと思います。

○和泉 直子 (NPO ふれあい広場ポーポーの木)



私は居宅介護支援センターである「ポーポーの木」で、主に訪問ヘルパーの仕事をしています。ケアマネージャーとしての資格も持っています。

サポートセンターの理事をお引き受けするにあたり、まずは市民活動とは何かを知ること、そして市民活動に携わっていらっしゃる多くの市民の皆さんの活動が活発になるように微力ながら応援していきます。「ここに住んでいて良かった」「稲城に住んでいて良かった」とみんなが思えるような街にしたいです。

○熊谷 毅志 (稲城市社会福祉協議会ボランティアセンター)



これまで、福祉に関するボランティア活動と社会貢献活動としての市民活動は、別のものとしてとらえられがちであったと思いますが、今後の福祉施策では、区別なく連携する協働のまちづくりが進められようとしています。

私は、福祉に関するボランティア活動と市民活動がスムーズに連携できるよう、その架け橋になりたいと思います。何より、ボランティア活動は「楽しい!」と思えることが一番です。市民活動に携わる皆さんが楽しく活動できるよう、理事としてサポートしてまいります。

私は、福祉に関するボランティア活動と市民活動がスムーズに連携できるよう、その架け橋になりたいと思います。何より、ボランティア活動は「楽しい!」と思えることが一番です。市民活動に携わる皆さんが楽しく活動できるよう、理事としてサポートしてまいります。

○田村 伸一 (稲城グリーン化プロジェクト)



私の所属団体の目標は循環型社会の実現です。そのためには、再生可能エネルギーの実用化と次世代を担う子供たちへの啓発活動が必要です。

私は地域活動を始めて5年目ですが、実に多くの市民の方が色々なスキルをお持ちでハイススキルであることを実感しました。

理事をお引き受けした理由は、登録団体の皆さまとの連携・コラボを図り、稲城の市民活動の活性化を図りたい

と考えたからであります。サポセン理事を通して、そのためのお手伝いが、少しでも出来たら良いと思っております。

○濱田 有里恵 (ママごち、稲城コミュニティビジネスクラブ)



市民活動は、団体ごとに歴史や想い、個性があるのが魅力的です。一方で、外からは良さが見えづらいように感じています。そこで、サポートセンターでの交流や発信を通して、団体や人と地域がさらに発展していけるようにできたらと思います。

人の行動、成長には仲間や環境がとても影響していると感じています。稲城の市民活動が活発になることで、一人ひとりがさらに元気に豊かになればと思います。理事として微力ではありますが、市民活動をしたい方々へ、私の経験を活かしていけたらと思っております。

○種田 匡延 (株式会社インターメディアリー)



矢野口で書籍出版と印刷物の編集プロダクション業を営んで10年になります。仕事や地域活動を通じて出会った市民や市内で働く方々

は、地域のため公共のために、自ら創意工夫をこらした活動を続けていて、このような「稲城愛」に満ちた方たちこそ稲城の魅力であり宝であると感じています。

そんな皆さんがより一層活動しやすくなるよう、「人と人」「人と地域」の橋渡し役(=インターメディアリー)として、微力ではありますが努力してまいります。

事務局職員を紹介します!

平成29年4月から市民活動サポートセンターいなぎの事務局職員として従事した八束弘敏さんが令和2年度をもって退職し、令和3年4月から山内朝美さんが着任しました。今後も中間支援組織として事務局の役割をしっかりと果たし、市民の皆さんに愛される組織運営を目指してまいります。

今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



前列左から吉津さん、小川事務局長、山内さん
後列左から嶋さん、板橋さん、小笠原さん